

アーカイブ Data Report NO. 44

(2020年9月19日)

〒500-8813 岐阜県岐阜市明徳町10番地 杉山ビル5F
E-mail: shikaku@npo-nak.com URL: https://npo-nak.com

シンポジウム「世界遺産などの地域の伝統文化をいかに伝えるか」 ～延年の舞について毛越寺藤里明久執事長の話より～

三宅 茜巳、加藤 真由美、谷 里佐 (岐阜女子大学)

延年の舞は、岩手県平泉にある天台宗別格本山毛越寺に伝わる舞である。法会のあとに催される延年はかつて、全国の多くの寺社で舞われていた。しかし、現在は毛越寺や岐阜県白鳥にある長瀧白山神社等で舞われているにすぎない。延年の舞から猿楽、能へと発展したとも言われている。

岐阜女子大学は、宗教上の尊厳を尊重し、演者の目に光が入らないようにフラッシュや照明を使わないことを条件に特別に撮影を許可された。

2008年9月に岐阜女子大学で開催されたシンポジウムで、ご本人も舞われた経験のある毛越寺藤里明久執事長から話をうかがった。デジタルアーカイブ関係者に伝統文化の記録・保管にあたっての貴重な指摘がされた。

新しい技術で伝統芸能を残したい

伝統芸能は、1年、2年だけでなく何百年と伝えていくなかで、少しずつ変わっているのだろうと思います。これは何か書物で書きあらわしたから残る、伝わるというものでもないと思います。最近の新しい技術で伝統芸能を残していくということは、われわれ伝承者、郷土芸能、民俗芸能の伝承者にとっても、非常にありがたいことと考えております。

古いから正しいでは困る

例えば、この岐阜女子大学で記録されたものがいまあって、何十年後かにそれを見て、

「あのときといまと、ちょっと違うね」

というような話になったときに、どちらが正しいんだろうかという、確かめようがない部分があります。どうしても古いほうが正しいんじゃないかと思ったりすることがありますが、実は、たまたまその人が間違っていたと、みんなわかっていただけ、そういうこともままあるわけでありませぬ。

デジタル化記録を検証して伝える

それで、そういうデジタル化記録されたものが、われわれ伝承している現場にもう1回フィードバックされて、そこでまた検証されていって、何回かそういうものを繰り返していくと、全体としての、ある意味で完全なカタチが伝わっていくのかなと思います。

四方から見る

それでも、映像というのはある一面でしかありませんので、四方から見れば、みんな人間の姿が違うわけですから、演じている者にとっては片面、あるいは4分の1しか見ていない。それをすべてそうだよという完全なものとしては、なかなか見られないのですけれども、声の出し方、あるいは手の動かし



方、脚の動かし方、これはなかなか口だけでは伝わらないものですので、映像があることによって、こういう伝統芸能が残されていく。そういうかたちになるのではないかなと思っております。

伝統芸能を地域共有

それから、伝承者の問題もありますので、学校でいろんな民俗芸能を学ぶという機会も最近は多くなりまして、平泉でも中学生が神楽を学んだりしております。それは伝統文化を地域のものとして共有してい



く、そういう一つの作業だろうなと思っているんです。あれはお寺さん、神社がやっているから、あれはわれわれは関係ありませんと言うことではなく、それは総体としての地域の大きな文化の一つであって、それをはぐくんでいる土台というのが、その地域の人々であったり、その場所であったり、風俗であったり、いろんなものがあるわけでありますから、その一つ一つをわれわれは共有していく、そういうことが教育の現場でもおこなわれていくべきだと思っております。

精神的な背景の理解

でも、若干懸念がありまして、われわれのように寺に伝わる芸能とか、あるいは神社に伝わる芸能というのは、その場があって初めて成り立つような精神性のものがあります。ですから、それを教育の現場に直ちに持っていったいいものか。あるいは、確かにそういうものを伝えられるのかという問題があります。身ぶり手ぶりだけがまねされていくだけに終わる可能性もありますが、それは教える方の一つの考え方、指導の仕方にもよると思いますけれども、できれば、そういう宗教的な背景というものを理解してほしいと、われわれは思います。

清衡は、敵・味方の分け隔てなく魂を浄刹に導きたい … 伝統文化を通じ精神性の背景を伝えたい

例えば、話がそれますが、平泉の成り立ちのなかに初代清衡という人がいますけれども、その方が供養願文(※「中尊寺建立供養願文」)をささげます。そのなかで、平泉の前の歴史のなかで、前九年の合戦、後三年の合戦というような中央と蝦夷(えみし)の戦いがある、多くの方々がそこで倒れるわけですが、そのときに清衡という人は、敵・味方、官軍・蝦夷の分け隔てなく、その魂を浄刹(じょうさつ)に導いていきたいという考えを示すわけです。

そしてそれは、しかも生きとし生けるものすべて、これを毛羽鱗介(もううりんかい)という言葉で表現するんですが、「もう」は毛ですね。「う」は羽ですから、獣、鳥。そして「りん」は鱗(うろこ)、そして魚介の介。毛羽鱗介に至るまで、そういう魂を救っていきたいという意味で平泉に寺々をつくっていくわけです。



その、いわゆる現世における、あるいは来世における安寧というものを、等しくいろんな者に、敵・味方なく導いていきたいという考えを述べているのですけれども、平泉というのはそういう精神性がバックにあって、そして初代清衡から三代秀衡まで、多くの塔と伽藍をつくって、そしてその仏の力をもって地域、この東北を治め、あるいは人々の幸せを考えるという背景があります。

そういう背景を知ったうえで、その長い歴史のなかでそういう精神を保ちながら、伝統文化を通じて精神を守ってきたり、あるいはそれが建物を守ったり、池を守ったりすることにつながってきました。そういう精神性みたいなものも、何らかのかたちで伝えたい。そのときに、やはり民俗芸能が、かたちとして非常に人々に伝えやすい一つの方策ではないかなと思っております。